市原市川焼台（かわやきだい）遺跡出土の小型銅鐸について

榊原弘二・山口典子

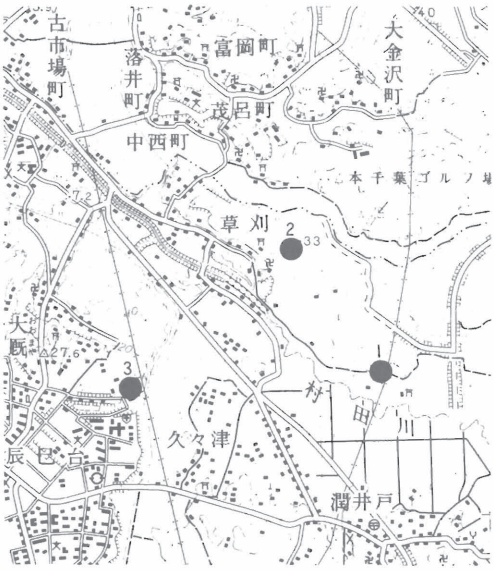

図1　遺跡の位置(1/50,000千葉)
1．川焼台遺跡　2．草刈遺跡　3．大厩遺跡

〔はじめに〕

ここで紹介する小型銅鐸は，1983年10月12日に市原市川焼台遺跡から出土したものである。

川焼台遺跡は，市原市草刈字川焼台他に所在し，村田川中流の標高40～45 mの北岸台地上に占地

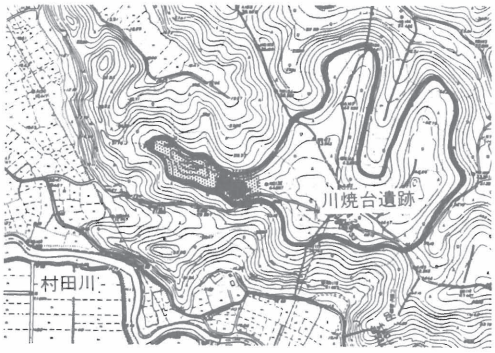

図2　周辺地形図(1/10,000)　83年度調査区

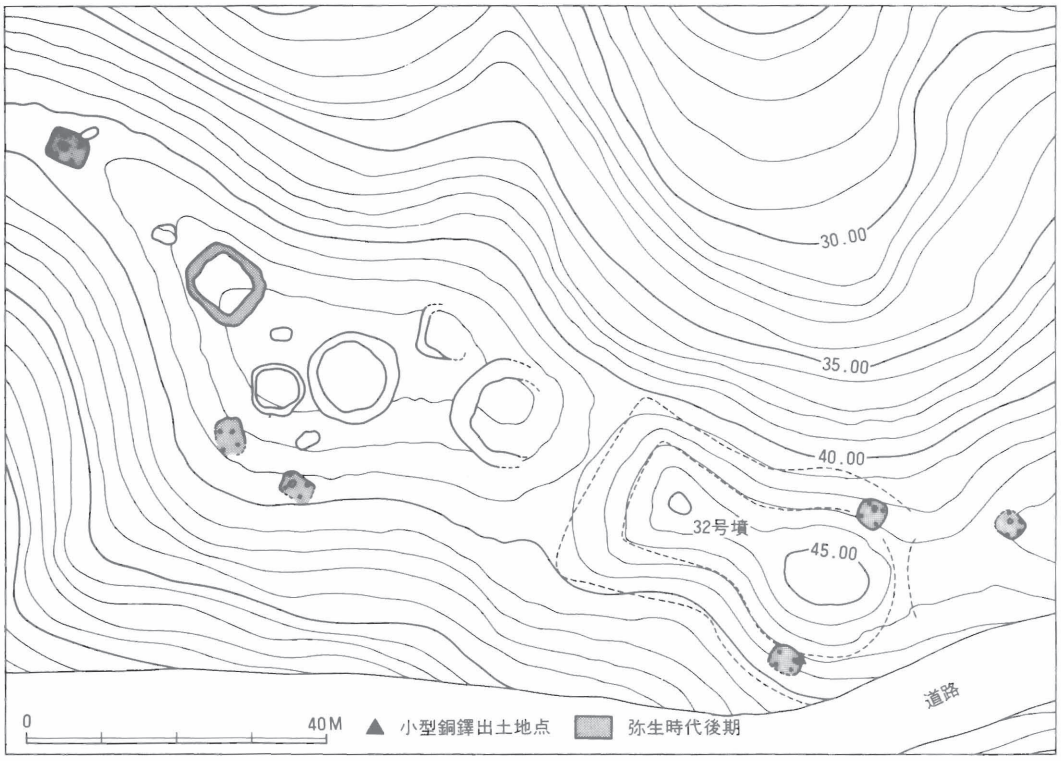

図3　遺構配置図(1/1,000)　(1984年2月現在)

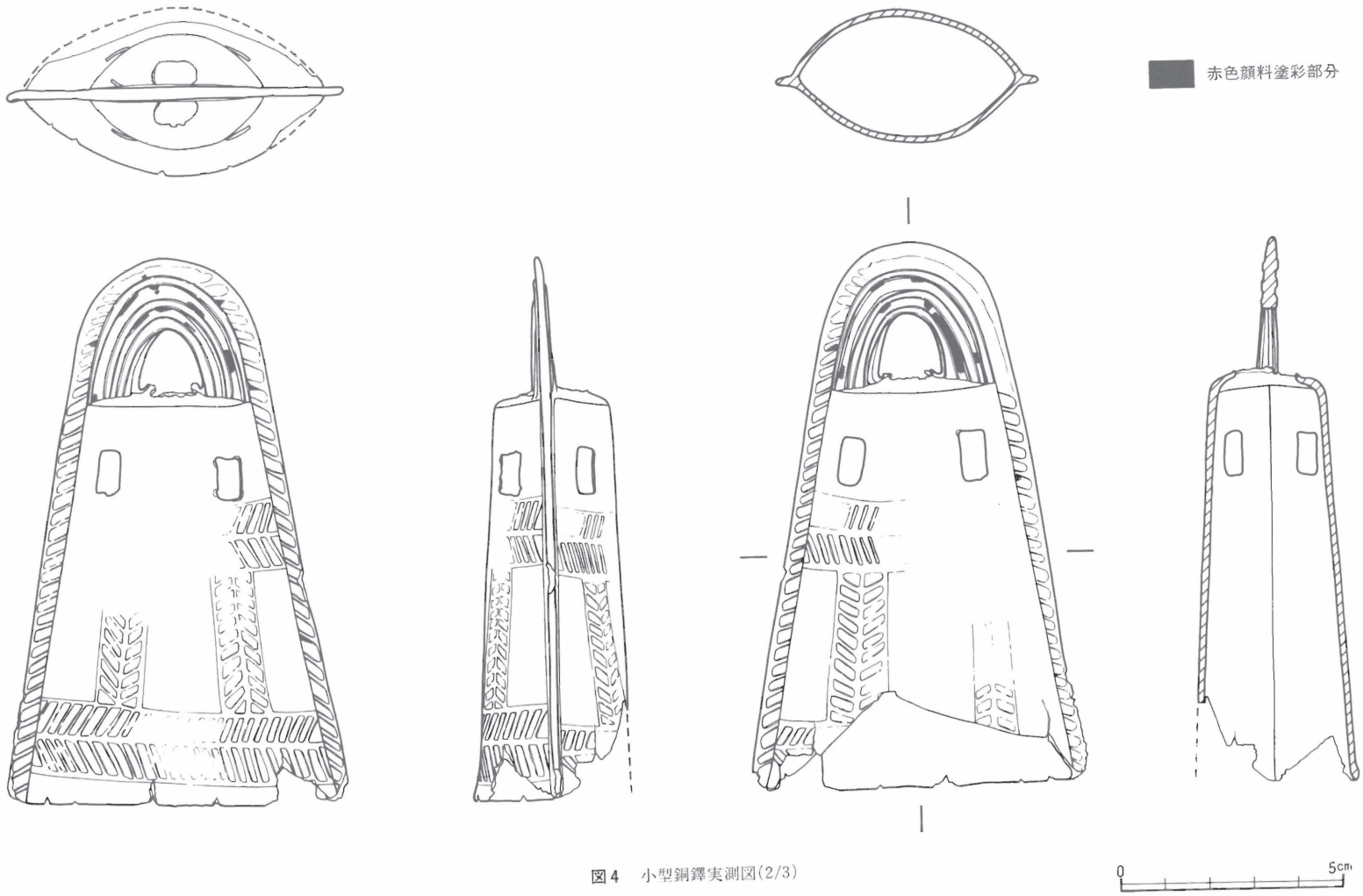

図4　小型銅鐸実測図(2/3)

する(註1)。1983年度の調査区域は，川焼台遺跡の一部のみで，1984年2月現在，古墳3基(後期古墳)・方形周溝墓・円形周溝・住居跡・土壙等を検出しており(図3)，さらに古墳下層にも遺溝の存在が予想される。しかし，遺跡全体の概要については，今後の調査にまたなければならず，小型銅鐸と関連する時期の集落についても，今後の課題である。

周辺においては，本遺跡と細尾根でつながる台地上に，大複合遺跡である草刈遺跡（註2）が所在する。現在調査を継続中であるが，弥生時代後期の住居跡が200軒以上，これに続く古墳時代前期の大規模な集落跡，方形周溝墓の存在も確認されており，本遺跡の当該時期の集落跡との関連に興味がもたれる。

〔小型銅鐸の出土位置〕

小型銅鐸は，川焼台遺跡内の草刈32号墳の調査中に発見した。掘り方や伴出遺物はなく，裾部の欠損を受けていない面を上にし，鈕を北側に向けて寝かせた状態で出土した。土層の断面観察によれば，小型銅鐸を出土した黒褐色土層は，古墳築造以前に構築された弥生時代後期の住居跡(001号跡）の覆土上層であり，住居跡床面の出土ではない。このような出土状況は，鳥取県長瀬高浜遺跡出土例（註3）と似ており，小型銅鐸や小銅鐸は，集落内からの出土が多いが，本例もその例外ではない。

〔小型銅鐸について〕

小型銅鐸は，裾の一部が欠損しているが全体的には遺存状態は良好である。青銅製で鐸面は鮮やかな青緑色を呈し，摩耗して光沢をもっている。鈕・身・鰭からなり，総高12.25㎝，現存重量150gをはかる。鈕高は3.25㎝，鐸身高は9.0㎝，身の両側に幅0.4㎝の鰭が裾端部まで続く。鰭・身の側縁は反りをもたず直線的だが，裾部で若干反り返る。舞部長径は3.7㎝，短径2.6㎝，底部長径は6.9㎝，短径3.8㎝（復元）とかなり扁平な楕円筒形である。舞部長径に比べて底部長径が大きく，身高が総高の73%の比率で，全体的に細身で整った形態を呈す。鈕は厚さ0.3～0.4㎝と扁平で，身の厚さは0.15㎝～0.2㎝でほぼ均一，鰭の部分では0.25㎝～0.3㎝を測る。身の裾の内面の内凸帯はない。

型持孔は，舞部に1孔，身の上部に2孔ずつ両面にあるが，裾部にはない。舞部の型持孔は瓢箪形で，一方はくずれた楕円形であるが，他は0.5×1.0㎝の方形のプランをうかがわせており，本来は鈕をはさんで2個の方形の型持をおいたが，鋳損じによって1孔になってしまったものと思われる。この型持孔には立上がりが残り，鋳放したままで何の整形もほどこしていない。身の上部の型持孔は内側に向かって丁寧に面取りしており，0.6×1.0㎝の整った方形を呈している。

鋳型の合わせ目は丁寧に研磨され残らないが，鈕孔下端に鋳張りが残る。また，舞部に0.1㎝×0.3㎝程の鋳巣がみられる。

本例の大きな特徴として，鈕・身・鰭にそれぞれ文様がみられる。鈕には外形にそって幅0.1㎝～0.2㎝程の3条の隆起線を鋳出している。鰭部にもやはり細い隆起線を斜行の櫛目様に鋳出しているが，鈕の頂上部付近では摩耗しており，ほとんど確認できない。鐸身部の文様も摩滅が著しく一部確認できないが，身の上部の型持孔の下と裾部に幅1.5㎝程の綾杉文の横帯を，両帯の間に二帯の縦の綾杉文帯を配している。縦帯の綾杉文は左側が下向き，右側が上向きと向きが異なっている。両面とも文様構成は同じで，上部の横帯から上には文様は認められない。

また，鈕や鰭の凹部に，赤色顔料の付着が部分的に認められ(図4)，鐸身部については不明であるが，少なくとも鈕・鰭には赤色顔料が塗彩されていたものと思われる。

〔おわりに〕

以上のように本例は，総高12.25㎝で従来の「小銅鐸」の範疇にはいるものである。小銅鐸の呼称は，「南朝鮮に於ける漢代の遺跡」（註4）において韓国出土の「銅鐸様の小形銅器」に対して使用され，その後，後藤守一氏が，駿河浮島村出土の2例（註5）に「銅鐸の最小形」のものとして「字義の如く」小形の銅鐸という意味で使用した。しかし，これらは一般に小型で素文，鰭がなく鈕も細い，内凸帯をもたない等の特徴をもち，いわゆる銅鐸分布圏の外縁地域，または分布圏外から発見される場合が多く，出土場所も集落跡である例が多い。このように一般の銅鐸とは異にする点

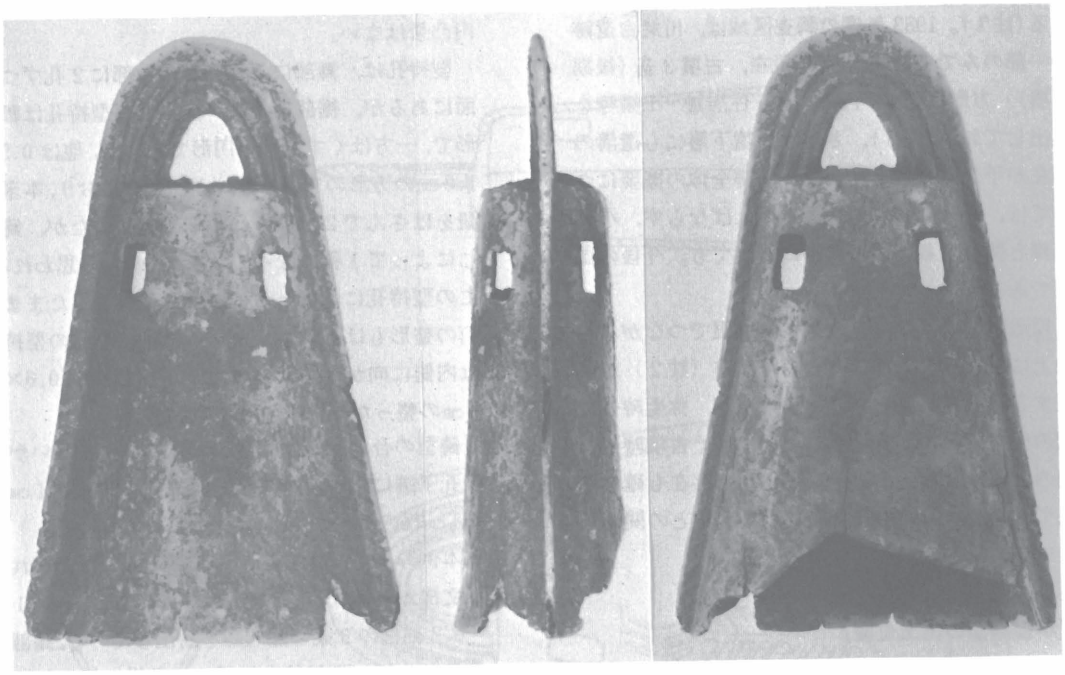

図5　小型銅鐸写真（2/3）

があるところから,「銅鐸の概念とは別のもの」(註6)「銅鐸を模倣した青銅製品」（註7）として銅鐸とは違うものとして扱われている。現在，別表の１１例（註８）が知られているが，最近栃木県田間，岡山県下市瀬，鳥取県長瀬高浜出土例等のように，身は素文であるが鰭をもち，鈕も扁平で銅鐸に近い形態のものも出土し，これらを「小型銅鐸」として「小銅鐸」とは区別している場合もある（註22)。

本例は,前述のように小型ではあるが鰭をもち，鈕も扁平で文様も有している等きわめて銅鐸に近い特徴をもっている。しかし，通例鋸歯文で飾る鰭には斜行の櫛目文を使用し，鐸身部の綾杉文帯は，銅鐸の文様として使用されているが，文様構成は類例がない等一般の銅鐸とは異なる点があり，内凸帯をもたないこと，集落内からの出土であることを考えあわせると，小型銅鐸としている一群に類似点が多く，本例もこの範疇にはいるものと考えられる。特に，同じ関東地方出土の栃木県田間例とは，形態的にもまた鈕に隆起線を使用しているなどきわめて類似しており注目される。

このように，本例は従来いわれている銅鐸分布圏から大きくはずれた地域から出土している点，小型銅鐸とはいっても文様をもつ等いろいろな問題を提起しており貴重な資料といえる。今後，時期的な問題，集落内の位置づけ等をあわせて検討していきたいと思う。

最後に文末ではあるが，三木文雄先生はじめ，白石竹雄調査部長，千原台事務所の三森俊彦班長には，資料や御助言をいただいたことを記して感謝の意としたい。

（２班・千原台事務所）

註

1）遺跡周辺の環境の詳細については，小久貫隆史他　『千原台ニュータウン１』　㈶千葉県文化財センター　昭55.３　高田博　「遺跡の位置と環境」　『千原台ニュータウンII』　㈶千葉県文化財センター　昭58.３　を参照されたい。

2）前掲註１　『千原台ニュータウンII』

3）長瀬高浜遺跡調査事務所　「鳥取県東伯郡羽合町・長瀬高浜遺跡出土の小銅鐸」　『考古学雑誌』　68－１　日本考古学会　昭57．６

4）藤田亮策・梅原末治・小泉顕夫　「南朝鮮における漢代の遺跡」　『大正11年度古蹟調査報告』　第二冊　朝鮮総督府　大14．11

5）後藤守一　「駿河浮島村出土の小銅鐸」　『考

番号	出土地	時期	出土場所	総高(cm)	文様	鰭の有無	型持孔	内凸帯の有無	文献
1	栃木県小山市田間小字西裏	弥生・後期	台地	10.25	鈕・突線 身・無文	有	無・身(一面)	無	註9・10
2	千葉県市原市大字村上字天神台 (天神台遺跡)	古墳・前期	集落跡	6.8	無文	無	舞・身	〃	〃11
3	神奈川県海老名市本郷 (海老名本郷遺跡)	弥生	〃	8.0	〃	〃	〃	有	〃12・13
4	静岡県駿東郡原町東井出開奉	不明	小丘陵	7.8	〃	〃	舞・身・裾	無	〃5
5	〃 吉原市大字船津字陣ヶ沢	古墳・後期	古墳 主体部	5.65	〃	〃	舞・身	〃	〃5
6	〃 静岡市有東東馬捨場 (有東第一遺跡)	弥生・後期		6.35	〃	〃	〃	〃	〃14
7	鳥取県東伯郡羽合町長瀬高浜 (長瀬高浜遺跡)	古墳・前期	集落跡	8.6	鈕・渦巻文 身・無文	有	舞・身・裾	有	〃3
8	〃 〃 東郷町北福	不明	小丘陵	9.25	無文	無	舞・身	無	〃15
9	岡山県真庭郡落合町下市瀬 (下市瀬遺跡)	弥生・後期	集落跡 井戸跡	6.6	〃	有	〃	無	〃16・17
10	徳島県美馬郡脇町江原	〃 中期		6.1	〃	無	〃	〃	〃18・19
11	福岡県春日市大字小倉字大南	〃 後期	集落跡 空濠	10.1	身・袈裟襷文	〃	舞・身・裾	有	〃20・21

別表 小銅鐸・小型銅鐸出土地一覧

古学雑誌』 23－4 考古学会 昭8．4

6）三木文雄 『銅鐸』 『日本の美術88』 至文堂 昭48．9

7）佐原真 「青銅器の変遷 謎の祭器－銅鐸」 『古代史発掘』5 講談社 昭49．6

8）滋賀県志那例 (梅原末治 「近江発見の小銅鐸」 『人類学雑誌』 50－10 東京人類学会 昭10．10）を入れる場合もあるがこれは小型である他は銅鐸と異なる点がなく除外して問題ないであろう。

9）野口義磨 「栃木県小山市田間発見の銅鐸について」 『考古学雑誌』 52－4 日本考古学会 昭42．3

10）野口義磨 「関東で初めて発見された銅鐸」 『考古学ジャーナル』7 昭42．7

11）浅利幸一 「千葉県天神台遺跡出土の小銅鐸」 『考古学雑誌』 68－3 日本考古学会 昭58．2

12）伊藤秀吉 「銅鐸の発見された海老名本郷遺跡」 『月刊文化財』95 第一法規出版株式会社 昭46

13）『海老名本郷遺跡』 富士ゼロックス株式会社 昭54．1

14）杉原荘介 「弥生文化遺跡調査の大勢 静岡市有東第一遺跡」 『日本考古学年報』1 日本考古学協会 昭26．10

15）名越勉・甲斐忠彦 「鳥取県東郷町出土の小銅鐸」 『考古学雑誌』 59－2 日本考古学会 昭48．11

16）岡山県教育委員会 「小型銅鐸を出土した岡山県下市瀬遺跡」 『月刊文化財』118 第一法規出版株式会社 昭48．7

17）新東晃一 「岡山県下市瀬遺跡出土の小型銅鐸について」 『考古学雑誌』 59－2 日本考古学会 昭48．11

18）梅原末治 「『銅鐸研究』出版以後発見の銅鐸一覧表」 『考古学雑誌』 23－4 考古学会 昭8．4

19）三木文雄 「小銅鐸の系譜」 『MUSEUM』184 東京国立博物館 昭41．7

20）鈴木基親 渡辺正基 「福岡県筑紫郡春日町出土の銅鐸」 『日本考古学協会第25回総会研究発表 要旨』 日本考古学協会 昭35．4

21）鈴木基親 渡辺正基 「福岡県筑紫郡春日町弥生遺跡出土の銅鐸」 『九州考古学』 10 昭35．10

22）このことについては，前掲註９の野口氏の論文に詳しい。しかし，小銅鐸と小型銅鐸とは，野口氏が指摘されているように形態的に差があるものの，本文中に記したように分布や出土場所，文様や内凸帯をもたないものが多い等の点で類似点も多く，どちらもその性格づけに関しては現在のところ明確ではないため，両者と銅鐸との関係等についてさらに検討の必要があろう。

追記

本文脱稿後，草刈32号墳の下層の調査が行なわれ，弥生後期の住居跡５軒（うち１軒は長径10ｍの大型住居跡）・古墳前期の住居跡1軒・円墳２基（後期古墳）・土壙等の遺構が検出された。

土錘小考

――房総半島における弥生時代以降の漁撈について――

岸　本　雅　人

１．はじめに

漁具に取り付けられる「おもり」を「沈子」という。発掘調査において出土する「沈子」は「錘（すい）」として総称されているのが一般的であろう。しかし「錘（すい）」とは広い意味での「おもり」のことであり，ただちに「錘」が「沈子」としての用途を示すものではない。重さを増すという機能は共通であるが，その用途は多目的であると考える。（文１）ここでとりあつかう「錘」とは，用途が単一的に漁撈具の一部品（文２），つまりは「沈子」として使用されるものに限って見ることとする。

「錘」は時代によって形態等が多少異なるが，その材質によって大きく石錘と土錘に分けられる。（文３）弥生時代以降になると，石錘は加工が困難であることもあってか，土錘に比較すると出土数は減少する。その点土錘は，重さ・形態等が自由に変化でき，大量生産が可能なためか，石錘よりも頻繁に用いられるようになったと思われる。

現在，わが国において認められる最古の漁撈活動は，縄文時代早創期に求められる。（註１）房総半島においても縄文時代の貝塚から出土する魚貝類の遺骸が示す通り（註２）縄文時代に漁撈活動が盛んに行われていたことは周知の通りである。また，漁撈活動に適する地理的条件を具える房総半島では，縄文時代中期から後期にかけて大規模な貝塚の出現を見る。このように，貝塚の広範な分布からであろうか，房総半島では縄文時代の漁撈についての研究は早くから進められ，現在ではその内容はほぼ明らかにされている。一方，弥生時代以降の研究は，農耕の伝播による経済基盤の変化から漁撈活動が副次的なものとして位置付けられ，その研究は進展を見るに至っていないのが現状であろう。しかし，出土土錘を詳細に見てみると縄文時代より，数量的には増加の傾向があり，形態的には現用例のものとほとんど違わない程の定型化を示してくるようである。このような状況をふまえると縄文時代よりも大きく進展した漁撈具による漁撈活動が行われていたと考えられる。また，そのことは弥生時代以降の農耕社会が内在する経済基盤のあり方，つまりは経済基盤の多様化（農耕文化自体がすでに漁撈文化的側面を内在しているということ）が示唆されるのではないだろうか。

いずれにしても漁撈活動は数々の進展を経ながら連綿として現在まで継続する。

以下，房総半島における弥生時代以降の漁撈活動の一端を出土土錘で見てみることとする。

２．出土土錘のタイプ　（図１参照）

縄文時代遺跡出土の石錘は形態的にはバラエティーに富み，土錘としては土器片錘が大多数である。一方，弥生時代以降の石錘は減少，土錘は定型化の傾向をたどる。今日，土錘の形態分類もなされているが，報告書等では今だ統一性は認められないようである。本項では文章を進める上で便宜的に大まかなタイプと名称を付すこととする。